（続紙　１）

京都大学	博士（　教育学　）	氏名	古川　雄嗣
論文題目	偶然と運命―九鬼周造の倫理学―		

（論文内容の要旨）

本論文は、九鬼周造の哲学の全体を総合的に解釈したうえで、とくにそこに含まれる倫理学的性格を明らかにしたものである。分析の視点としては、第一に、九鬼自身のテクストの全体に巨視的かつ微視的に目配りし、時間論、偶然論、芸術論といった多岐にわたる主題の有機的な関係を明らかにすること、第二に、九鬼自身が哲学とは哲学者個人の「体験に基づいた認識」であることを強調していることに基づいて、彼の伝記的側面から窺われる彼の哲学の動機に配慮することを掲げている。

まず序章において、九鬼の伝記的側面とその哲学的主題との関連性が考察されている。ここでは、九鬼の哲学の動機となった体験が、九鬼隆一と岡倉天心という「二人の父」に引き裂かれた自己の同一性、ならびに隆一と岡倉との関係に翻弄されて重篤な精神疾患に陥り、孤独な死を迎えた母・波津の「悲惨な運命」を目撃したことにあったとの見方が示され、その体験が、実存の偶然性、ならびにその偶然的な実存の生の肯定という哲学問題に収斂していったと推察されることが論じられている。

この序章の考察を背景として、本論文は、まず第一章と第二章において、主に1920年代に発表された時間論と芸術論を考察し、それを基礎としながら、第三章以降において、偶然論を中心とした1930年代以降の九鬼哲学の本格的な展開を詳論している。

第一章では、回帰的時間の観念の論理構造とその意義が考察されている。時間は、水平面と垂直面の交わりという構造をもつと考えられる。水平面においてはその都度の異質な瞬間の非連続な連続であり、他方でその各瞬間は、垂直方向に同一の瞬間を無数にもっている。そしてこの構造に基づいた「時間の永遠化」の方法として、各現在を垂直的な厚みをもつ「永遠の現在」と見る生き方、およびその都度善意志を更新してそれを水平的に持続させる生き方が示され、その二つの生き方が、のちの九鬼哲学の展開において、折に触れて再論されることになることが論じられている。

第二章では、芸術・文芸論が中心的に取り上げられ、九鬼哲学における芸術の意義が考察されている。九鬼にとって、言葉の本来の意味での芸術とは「永遠の現在」を表現するものであり、やはりそれも「時間の永遠化」の方法であることが、まず明らかにされている。そのうえで著者は、その意味での芸術は自己の人生そのものに美的形式を与え、それを鑑賞の対象とすることによって肯定しようとするものであり、その点においていわゆる唯美主義の性格を強くもっていることを論じている。

続く第三章から第五章までは、『偶然性の問題』（1935年）を中心として、九鬼の偶然論についての解釈が集中的に行なわれている。

まず第三章では、九鬼による種々の偶然性概念の整理・分類が概観されたうえで、とくに形而上的意味の偶然性である「原始偶然」の意味内容に関する考察が展開されている。原始偶然とは「因果系列の起始」理念であるとされているが、著者はこれを第一章の時間論と対照させることにより、直線的時間の原初ではなく、回帰的時間のすべての瞬間を指し示す概念であることを明らかにしている。

第四章では、前章で示された「原始偶然」概念の解釈を出発点として、「形而上的絶対者」の論理構造が考察されている。絶対者とは、無限の可能性の全体としての「絶対的形而上的必然」と、その一部分が現実化したものである「原始偶然」とを両面とする「必然―偶然者」である。このことから、必然性の否定（可能性の減少）が偶然性を生み、さらに誕生した偶然性の継起と累積が再び必然性を構成していくとい

う、「必然の偶然化」と「偶然の必然化」の往還的構造が明らかにされている。

第五章では、形而上的絶対者において必然性と偶然性とを否定的に媒介する第三項として、「運命」の概念について集中的な考察が行なわれている。著者は、「偶然を必然化する原理」としての「合目的性」の問題について、九鬼が田辺元と詳しく議論していることに注目しつつ、それをふまえる形で『偶然性の問題』において示された「運命」の概念は、その都度の偶然を目的的に必然化する実践を意味することを明らかにしている。そのうえで、とはいえ、その実践の具体的内容がどこから与えられるのかという問題が、さらに問われるべき問いとして示されている。

第六章では、その問いに迫るため、考察の対象がいったん『「いき」の構造』（1930年）に移され、それと『偶然性の問題』との比較考察が行なわれている。偶然性と可能性の関係を厳密に検討することによって、著者は「いき」という生き方が、偶然的な他者との出遇いの瞬間を美的に鑑賞する唯美主義的な生の肯定の論理である反面、それを必然性に展開せしめようとする未来への目的的な動向を欠いていることを明らかにしている。そしてこの他者との出遇いの必然化という契機が、「運命」の概念に具体的内容を与えるものであるという見通しが示されている。

第七章では、前章で示された見通しのもと、他者との出遇いという観点から、改めて「運命」概念が再考されている。偶然性とは「二元の邂逅」である以上、空間性の契機をもつものであることに改めて注意が向けられたうえで、「運命」とは、その都度出遇う自己と他者とが、相互に相互を内面化していく共同的な実践であるとの再解釈が示されている。続いて、考察の射程が1937年の論文「日本的性格」に拡げられ、そこで示される「自然」概念の分析が行なわれている。「自然」とは、「運命」によって必然化された偶然性が、さらに「習慣」の媒介によってかえって偶然化した概念ではないかという冒険的な解釈が試みられ、ここに九鬼哲学の一つの到達点が見られている。

以上の考察をふまえ、結論として次のことが示されている。九鬼哲学の根本問題であった実存の生を肯定する生き方は、芸術と倫理という二つのそれに帰着する。前者は瞬間の垂直的な美的肯定であり、後者はその水平的な目的論的肯定である。両者は容易に相容れないものであることを論じたうえで、著者はあえて、後者の積極的意義を強調する見解を示している。その理由として、存在の偶然性をいかに目的的に必然化し得るかという問題が、「生きる意味」の生成と自覚の問題にほかならないことが挙げられ、その観点からの発展的考察が、今後の課題として示されている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文の意義として、第一に指摘すべきは、九鬼周造の偶然論について、「必然の偶然化」のみならず「偶然の必然化」の契機を読み取ることにより、九鬼哲学の倫理学的、実践哲学的側面を浮き彫りにした点にある。この点は、決して少なくはない九鬼研究のなかでも特に小浜善信による先行研究を最高の到達点として認め、これと深く対峙するなかで生み出されたものである。

従来の研究では、現実世界を必然性（全体性）の自己否定態と見る「必然の偶然化」の側面にのみ目が注がれる傾向があった。しかし本論文は、偶然性と必然性との否定媒介的な動的構造を明らかにすることにより、必然性の否定として実現した現実世界の偶然性はまた、自己の偶然性を否定して必然性を実現しようとする運動をもち、この「偶然の必然化」の運動に人間存在が自覚的に参与するところに、偶然性を基礎とする実践哲学が成立することを論じている。この側面に注目することによって、本論文は、従来の研究が、偶然を必然化することなく偶然のままに肯定する世界観と人生観として九鬼哲学を解釈して来たのに対して、むしろそこに、その都度の偶然を不断に必然化しようとする倫理的な実践の論理が語られていることを実証している。

第二に、本論文が、上記の観点をふまえて、新たな九鬼哲学の全体像を描き出したことの意義を指摘することができる。

本論文は、九鬼哲学が、その都度の瞬間の美的肯定を志向する芸術的人生観と、目的論的肯定を志向する倫理的人生観との二つの生き方を論理化していることを明らかにしている。従来の研究が、ほとんどもっぱら前者のみを語ってきたのに対して、本論文は、容易に相容れない二つの生き方が拮抗する、緊張感に満ちた九鬼像を描き出すことに成功している。

第三に、本論文の方法論的側面における意義として、その高い実証性と解釈の正確さを指摘することができる。

とりわけ、偶然論を時間論と対照させることによって、「因果系列の起始」とされる「原始偶然」の概念が、直線的時間系列の原初という意味ではなく、回帰的時間におけるすべての瞬間を意味するものであることを明らかにした点は秀逸と言える。それによって、従来の多くの研究の誤読とそれに基づく評価とに修正が加えられたことの研究史的意義は大きい。

第四に、第三の点とも関連して、テクストの丁寧な読み方が評価に値する。

本論文は、たとえほぼ同一内容の論考であっても、わずかな語句の言い換えや表現の変更を見逃さず、その経緯と理由を丹念に辿っている。その作業によって、未発表論文の執筆年代を再考するといった歴史学的な貢献も果たすと同時に、それをテクスト全体の解釈に有機的に関連づけることによって、本論文の実証性に厚みを加えていることを評価することができる。

第五に、本論文の背後に伏在する著者の深い問題意識を指摘することができる。「偶然の必然化」という著者の着眼点の背景には、実存の偶然性がしばしば「生きることの無意味さ」という意味でのニヒリズムをもたらすという切実な問題意識がある。それが九鬼解釈の途上において折に触れて浮上することによって、九鬼のテクストの単なる後追いにとどまらない、深みのある解釈に結実していると同時に、本論文をして、「生きる意味」の生成と自覚という教育学問題に対する哲学的応答という性格をはらんだものとしている。

とはいえ、もとより本論文に残された課題も少なくない。
第一に、本論文は全体としてテクストの執筆背景や相互の因果関係に周到に目配りされた実証性の高い研究でありながら、第七章第三節で取り上げられた論文「日本的性格」の分析に関しては、その側面への配慮がなお不十分であると言わねばならない。この論文のもとになった講演が、第三高等学校で行なわれた「日本文化講義」であったことを鑑みれば、内在的展開と外在的影響との格闘をこそこの論文からは読み取るべきではないかということが指摘された。
第二に、本論文が「運命」の意味内容として示す、自己と他者とが相互に相互を内面化するという実践の具体的な意味が、なお十分に明瞭とは言えない。たとえば西田幾多郎は「愛」という概念によって一見類似した事柄を語っているが、著者が解釈する「運命」はそれと同一の意味内容を指しているのか。その点についてのさらなる考察の可能性が指摘された。
第三に、本論文は「偶然の必然化」という倫理学的側面とその意義を強調するあまり、かえって九鬼哲学において芸術が占める比重をやや過少に評価される結果になってはいる。九鬼哲学における芸術と倫理の拮抗は本論文の主眼の一つであるが、その緊張関係をより尖鋭化して論じる可能性もあったのではないか。そのような意見が示された。

しかしながら、これらの問題点は著者自身がよく自覚しているものであり、今後の研究の深化に期待すべきものではあっても、決して本論文の学問的価値を損なうものではないことが認められた。
よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。
また、平成２５年９月８日、論文内容とそれに関連した試問を行なった結果、合格と認めた。
なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものと認める。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降